

## 戦後開拓

戦後開拓とは、第二次世界大戦が（日本は大東亜戦争と言っていた）日本の敗戦ということで終ってからの全国的に、畑になりそうな場所を、食糧増産の必要に迫られて国策として開拓始めたことを言うのである。

それが又、海外からの引き揚げ者や、復員軍人の就職の場ともなり、切実な当時の国内事情の要望でもあった。

当時の植民地、朝鮮・台湾・樺太・満州からの引揚げ者も数多いところに、東京・大阪外大都市の空襲で、家と職場を失った人達の疎開先も、戦後開拓の名の下に避難地に否応なく、住まわされた人もいた。

佐呂間町の中に、浪速部落とか神奈川部落と疎開のための出身地の地名を、地区名にし

## 戦後開拓、浪速地区

一九四五年（昭和二〇年）に入れば、第二次世界大戦の、大平洋戦争の日本は、いよいよ敗戦の色濃くなって来た。日本各地の大都市は、連合軍の空襲によって、壊滅的打撃を受けてしまった。大阪（浪速地区出身者の故郷の地）は言うに及ばずの悲惨な被害があり、大阪府は、被害市民を、北海道の未開地の開拓に向けようと、止むに止まれぬ処置として

たところもある程だ。

知来の中にあつた「尚和」などは、尚和と名付けられるまで「復員部落と呼ばれていたところもあつた。

戦後開拓の特徴は、佐呂間の中ばかりでなく全く立地条件の良い処は少なかった。各地区にそれで一・二年で脱落して出て行く者があつて、入れ替りも可成りあつた。

昭和三〇年代に入つて、大都市の産業が恢復発展するに従つて、離農者が益々増えて来るようになったら、政府は、戦後開拓者のみに、離農促進を計るため、昭和三八年より、離農資金として、四五万円離農者一戸当りに対して出し始め、昭和四二年には、一戸当り五〇万円とその頃の経済発展に伴つて、物価の上昇激しかったため、離農資金も高くなつた。佐呂間町内の、戦後開拓者の離農に拍車がかつたのは言うまでもなく、各地区の残

行つた結果でなかつたか。

だが北海道は、明治の初めに開拓が始まつてから約八〇年経つていて、農地として条件のよい土地は殆んど、既存の農家に占められていた。そのようなことで、大阪出身の、浪速開拓の物語は、栃木県出身者が足尾銅山の鉍毒に逐れての、栃木地区の開拓の苦労に匹敵するのではないだろうか。（筆者の想い）

何しろ佐呂間町開基百年の、平成六年は、西暦で一九九四年だから、浪速地区の人達が

留農家は、離農後の再配分による増反と言うことで、残留者の営農確大には当時はやかつたが、昭和五〇年以後、農家全般がトラクター等の導入による機械化が促進されて来たら、資本を注ぎ込んで尚確大するか、資本を掛けず営農に終止符を打つかの界目が来たとき、再度の離農者が出た。其の時は、耕地を確大する農家に貸し付けて、小作料を貰うというか、時価相場で売るか方法で、離農資金は政府から出ない時であつたが、営農を止めた農家は、小作料が高額になつていた上、土地代金も可成り高くなつていて、有利な条件で、離農している。

尚、残つて経営規模確大し、戦後開拓も、開拓の名も忘れるようになった二代目の、後継者の優秀な農家は、がっちりとした農家になつている。

文責 徳永 良行

昭和二〇年八月一二月に、大阪を出発したのだから、その年は、一九四五年約五〇年の歳月が流れている。佐呂間町の開基百年という歴史の流れの中の、丁度中間と言うところとなるので、歴史の節目になると考えられる。この浪速地区の記録をと、聞かせて頂くため松本知次氏宅を訪れたら、知次氏は、軍の召集を受けて出征中だったので、復員してこの浪速地区に来たのが、昭和二二年二月一日だったから、最初の、大阪から僕の復員までは、家内でないと言われないと言われたので

奥さんの、松本きみえさんの記憶を元にして  
當時を記します。

### 大阪を出発（敬称省略します）

大阪府が、戦災疎開者を、北海道開拓の名の下に、募集し集めた人達を、集合させて、その集団の代表者となってくれと言われ、承諾させられたのが松本時次（友次の父）であって、大阪出発と同時に、松本時次が責任者の立場となって北海道に向って大阪駅を発ったのが、昭和二〇年八月一二日、後三日したら終戦とはつゆ知らず。きみえの記憶には、大阪駅に下車した人数と戸数は消えていたが、現地の、佐呂間村に到着したとき、中佐呂間駅に下車したときは、四五戸であった。

八月一三日、秋田駅に到着したら、秋田駅長が、代表の松本時次に、戦局の都合で青函連絡船が今不通となっているから、近くの小学校に行つて、連絡船就航の知らせあるまで待機してくれと言つて来たので、代表松本時次は、止むなく全員を、秋田駅の近くの小学校に引率そこで宿泊することにした。

一四日は何も連絡の知らせない、一五日に小学校備え付けのラジオと、秋田県庁からの日本の連合軍に対しての、無条件降伏、敗戦を知らされた。

代表松本時次は、責任者として、戦争に敗けたが、戦争は終つた行き先に悩むが。

戦争継続ということによる。大阪市民の疎開なのだから、行く先目的地はどんなところ

か全くの未知数の所、戦争がなくなつたら、大阪はもう空襲もないし、何んとか大阪に帰れないか、どうしたらよいものか思案にくれていたが、北海道行きの青函連絡船の就航の見通しもないまま、一五日が終り一六日に入つた。八月一六日、青函連絡船北海道行きの大阪疎開者の乗船の許可ありと知らせが来た。代表松本時次は全員に、大阪に帰るか、北海道に行くかと聞いたら、殆んどが、大阪には、帰る家は壊滅してなくなっているし、生活の見通しもない等のことで、殆んどの人が仕方ない北海道に行こうとなつた。

秋田を出発、もう空襲の心配もなく、連絡船の連合軍の潜水艦の襲撃の恐れもないという安全な旅で、当時の佐呂間村に着いたのは、昭和二〇年八月一八日であった。

佐呂間駅下車したら、思い掛けない程の、大橋村長以下役場職員外、今ではもうどなたか判らないが、お世話して下さる方々がおられました。そうして、宿泊先等割当てて下さつて、松本時次代表一家は、現在の中園の当時の名の、東部会館に当分宿泊することになった。

その年の佐呂間村は、大凶作の年であり、また農家の働き手の男の人は殆んど出征して、凶作の秋の収穫作業が遅れていたため、役場の方から、援農の手配をしてくれたので、農家手伝いという仕事によって、昭和二〇年の越冬の食糧の確保もなんとかなり、昭和二〇年一月二八日に浪速の地に落ち付くこと

が出来た。

八月一八日に、佐呂間駅に下車したときの戸数は、四五戸であったが、いよいよ現地の浪速地区に入植したときは、三七戸であったが、外はどうなったか今のところ全く思い出せませんと。松本きみえ

入植時の住宅は、居小屋と言つて、全く狭苦しい、板囲いのバラック建でありましたが、大阪で空襲で家を焼かれ失つてからやつと。まあ家族が一つ屋根の下に入ることが出来たときは、本当にほっとしましたが、これからこの原始林の中でどうなつて暮らして行くのやらと、不安もずい分ありました。

一応戦禍に合つて以来、小学校に通う子供達の義務教育の問題も、仮の小学校通学として、役場の方から、富武士小学校に通つていくれとの通達があつて、浪速小学校が建設される昭和二十一年一二月まで、富武士小学校に通わせていた。

入植し、子供の義務教育の富武士小学校に仮通学も出来るようになって、いよいよ、この地区の正式の名をどうするかとなつたときに、全戸の人達が集つて決定したのが、全員のご郷の名、「浪波」というのがどうだろうと誰言うともなく話し出され、それがよからうと簡単に決つたが、文字について少し選ぶのに、「浪速」「難波」「難花」三種もあったが、最後に満場一致で「浪速」と決定して今に至っている。開拓當農の話の前に、大事な子供の義務教育について。

又小中学校に話を戻しまして

戦後開拓で、一つの地区で独立した小学校があったのは、佐呂間町内では浪速だけであった。だが時世の流れの中で、三〇年にして浪速小中学校は廃校となってしまった。

昭和二十一年二月二十八日、浪速小中学校新築完成、二二年三学期より児童の通学始まった。

昭和二十八年七月二十五日、浪速一三〇番地に移転改築。そのころ神社の話も出はじめた。

昭和三〇年神社建築大具体化される。昭和三十一年八月二十四日、大々的に校舎改築し、一六坪の物置きを遊び場に改築。

この年、佐呂間の各市街の商店、工場、事業所等の寄付を仰いで、浪速神社も建設された。

昭和五二年三月、浪速小中学校が、幌岩小中学校に統合された。

小中学校統合と同時に、浪速神社も幌岩神社に合祀された。

### 開拓営農の話に入ります

開拓営農といっても、日本でも有名な大都市の真中で、土などほじくる仕事などしたことのない人達ばかりが、日本の最北端と言うところの原始林を伐り拓くの大変だ。

伐採するにも、鋸の歯の目立の出来る人も少なく、先づ邪魔物の立木を焼いて除くのが手っ取り早い。立木を焼く火入にしても、営林署まで出かけて行って、火入許可を取る

などめんどうな書類持って行って許可を受けてから、大勢の手伝いの火の番を頼むなど、そんなことで、地区の代表の松本時次が自然、営林署等との連絡の責任も果すことになり、初代の、開拓浪速地区代表兼、森林愛護組合長となった。

離農者も相次ぎ、入植時に八戸大阪に帰った。昭和二十二年に五戸止めて行く、二三年秋から翌年春までに二三戸、大阪が復興はじめたと集団離農、実際の大阪人は、九戸となつてしまつたが、離農跡地にはそれぞれ開拓に意欲のある引き揚げ者や、大都市から疎開して来る人などで、営農の軌道に乗つたのは昭和三〇年頃なのだが、生活もこれからよくなるかなと言う頃になって、大凶作が四年も固まつて続いた。それは、昭和二十八年、二十九年、三十一年、三十二年であつた。

凶作の悲惨さは、ここに書かないが、網走支庁管内の市町村の人々は、よく判つてくれていると思うが、オホーツク海からの潮風を受ける浪速地区は、又大変な被害が続いたのだった。

凶作の固つて来る前に、別の記事にするが浪速地区の山火事もあつた。

昭和三二年までに、苦しい中に入植一〇年を超えていた。昭和三〇年代に入つたら、大都市の復興も可成り進んで、苦しい開拓農民には、大都市からの人手が欲しいとの誘惑もあり、中学卒業したばかりの子供を、本州方面からの、紡績工場からは特に熱心な誘いが

あつて、昭和三〇年代から四二・三年ごろまでは、可成り応募して行つた。

大都市の産業復興は、子供ばかりではなく大人達も浮き足立つて、昭和三七年から、戦後二回目の凶作群が始まつたら、一家を上げての離農者も出始め、政府の開拓行政も離農資金を出すことが決定し、昭和三八年から、離農者一戸当り四五万円出すからと、離農奨励が始まつて、第二次凶作群、昭和三七年、三八年、三九年、四〇年、四一年と五年続いた頃に、浪速地区の農家は半分以下になつてしまつた。

一時は、営農が落ち付いていたところ約三〇戸あつたのが、昭和四〇年代に入つてしまつたら、一〇数戸になつた。

大々的に離農者出始める最中に、予てから浪速地区の人々が望んでいた電燈が、昭和三九年に付いた。高額の負担金に耐えてその施設を完了させた。

戦後の、第一次凶作群が去つてから、冷害の被害の少ない酪農に、営農の改善の話が持ち上つて、全戸ではなかったが大方の農家は、酪農に切り替えた。酪農も何とか軌道に乗りがけたころ。昭和四一年各戸に電話の施設が出来た。

昭和四〇年代に入つてからは、各戸の営農も、政府からの離農資金をもらつて離農した人の、後地を購入して、営農の規模確大した残つた開拓農家は、もう開拓の名など付けて話しをするのは、似合わない程に各戸は向上

して来ていた。

日本の戦後の経済復興に伴って、農村地帯に様々な影響を及ぼして行く中に、浪速地区に残留し、昭和三五年ごろから酪農に営農改善した直後、タイミングよく、農林省に於て、戦後開拓農家の基盤整備について検討し、水道施設をさせようと、国会を通過させたのが具体化され、戦後開拓農家に簡易水道施設に對して補助金を出して全戸に完成させた。その施設が、残留農家の酪農に大きな役割となったのだった。

浪速地区の記事について、書きたいことは山程あるが、歴代の自治会長とPTA会長外、様々な役職された人々の名と功績を、省きます。

昭和四六年に、開拓行政打ち切りに寄つての、佐呂間町開拓農業協同組合解散式が、一〇月二七日行なわれ、浪速地区の農家も一般農家と肩を並べることになった。

その後の営農は、農耕馬を機動力の主力から、耕耘機からトラクターへと変化して行く中に、耕耘機は、松本知次が導入それは昭和五〇代に入ってからだった。

その頃、佐呂間町農業協同組合の方では、トラクター利用組合を、各地域毎設立させて、当時の農家の経済力では、トラクター個々の所有が無理があるため、トラクター導入資金利用によって、大規模農家育成の計画を押し

進めていた。浪速地区も昭和四五年に、トラクター利用組合を設立して、その方の資金によって、トラクター関係の農機具利用による、農業経営に切り替えた。

トラクター農業経営に営農が変りつつある中に、世の中の変化は、農村は過疎化激しく、一次ストップしていた離農が再発し、現在、浪速地区に在住している家は、

稲熊一・松本知治・増田元枝・三管道置

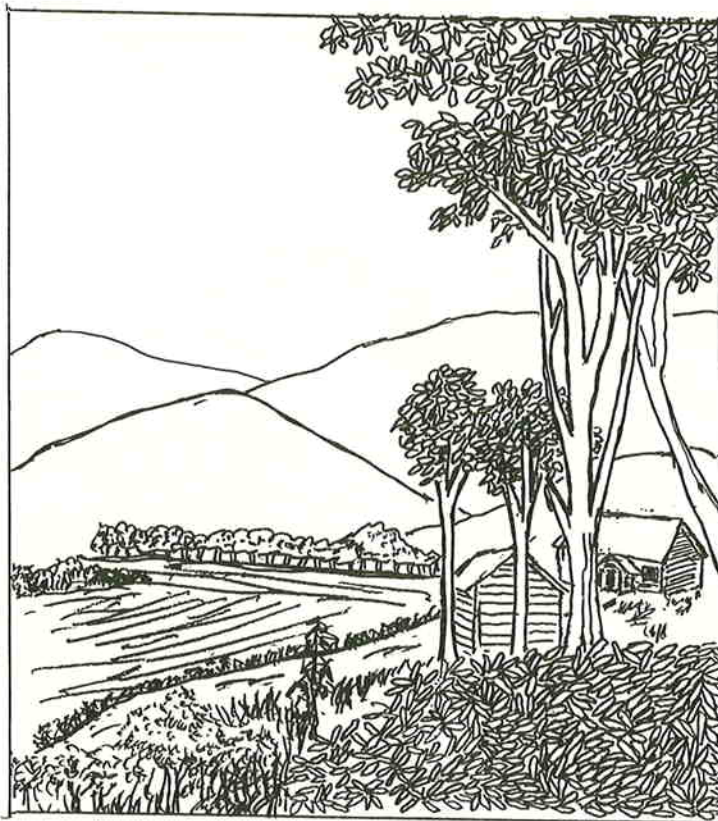
鈴木久四郎・和泉享・芦沢吉夫・矢野勝利  
佐々木勇次・の九戸となっている。

尚、幌岩地区自治会との合併等の件は、記事の中の、小中学校統合と、神社の合祀の記事にて御了解していただくことにして、戦後開拓、浪速地区を終ります。

語り手 松本 知次

松本きみえ

文責 徳永 良行



## 浪速地区の山火事

戦後開拓と「浪速」の開拓を言ったが、佐呂間開基百年の、平成六年から遡ると丁度五〇年となる。終戦の昭和二〇年から始まったのだから。

開拓の苦勞した思い出は沢山あるが、命がけだった特に忘れられないのが、隣の人の開墾の火入が、山火事になったことだった。

山火事になる五、六日前から晴天が続いていたので、野山は充分に乾燥していたのだ。山火事は、昭和二年五月一三日午前〇時頃から始まった。

それは私の隣の人が、二日前ぼさ（畑にする箇所のない草木）焼きをしたのが、当日になったら、初夏を思わせるような、南東の暖い少し強い風が吹きだし、隣の二日前の消えたと思っていた残り火が、目を覚まして起き上ったように、燃え広がったのであった。昭和二〇年一月に現地に浪速の人達が入ったから、開墾の第一年は、昭和二一年が開墾の第二年は昭和二二年、まだまだそこら中ぼさだらけ、忽ち当日の強風にあおられて火事は広がった。

また別な場所二箇所からも、火の手が上って大変な騒ぎになって、とうとう私の家まで焼かれてしまった。それでも家屋の焼失は、他の家は、逃れたのが幸いであった。隣部落富武士・幌岩からの応援も三手に別れての消

火作業になった。そのうちに、佐呂間、浜佐呂間消防団に連絡がついて、両消防団も消火の仲間に入ってくれて、午後三時頃やっと山火事は納まった。

山火事の恐ろしさ、大げさに言ったら、大自らの燃える様の恐ろしさを。眼前に見、又体で体験したので、私は一生忘れません。先程も一寸書きましたが、我が家が焼失して行く様の体験は、表現の仕様のないものです。

文責

松本 知次

